國學院大學学術情報リポジトリ

綿矢りさ『インストール』と柳美里『自殺の国』の間で：サイボーグ化する若者たち

メタデータ	言語: Japanese
	出版者:
	公開日: 2023-02-05
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: スペッキオ, アンナ, Specchio, Anna
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000713

綿矢りさ『インストール』と柳美里『自殺の国』の間で
—サイボーグ化する若者たち—

スペッキオ・アンナ

一、はじめに

綿矢りさ『インストール』が出版されて二〇年が経過する。しかし、今、改めて再読してみると、まだ新鮮でリアルに感じられるのはなぜだろうか。本小説に登場するコンピュータやインターネットは、現代のパソコンやネットの世界と若干異なってはいるものの、いくつかの共通点も認められる。機械の利用と「人格の二重化[1]」とその必然性、そして女性と機械の関係の側から考察すれば主人公の野田朝子は現代の若者とはあまり相違がないようであるが、共通点と相違点をどこに読み解くべきか。さらに、現代日本社会の元にある思考が本小説ではどこに認められるべきか。本稿は論者が進めている日本現代女性文学における女性とテクノロジーの関係をめぐる研究の一環である。二〇年後に再読する『インストール』の面白さのポイントを検討するため、「自分ひとりのチャット部屋[2]」に引き続き本

稿を展開する。本稿では、『自分ひとりのチャット部屋』での分析をさらに進めて、文学批評やサイボーグ・フェミニズムと呼ばれる研究の動向を取り入れつつ、『インストール』におけるインターネット、女性と機械の関係性、ゼロ年代の若者の問題などを分析しながら、本小説を再読する興味深いポイントについて記述する。最後に、『インストール』をゼロ年代のサンプル作品として取り上げ、一〇年代の作品と比較しながら当時の家族のあり方と若者が見る、あるいは批判する日本社会に目を向ける。言い換えれば、ゼロ年代の若者に何が「インストール」されたのか、そして、現代の若者と比べてどのような共通点、あるいは相違点が認められるかについて論じる。こういった比較をするために、ゼロ年代の代表小説とした綿矢りさ『インストール』を一〇年代に書かれた、若者やインターネットの世界や家族の有様というテーマに触れる柳美里『自殺の国』を取り上げて考察していく。

二、女性は機械に弱いか

前稿「自分一人のチャット部屋」では、ゼロ年代の文学と若者とインターネットについて説明し、『インストール』はどのような環境から生まれてきたかについて論じた。そして、フェミニズムとサイボーグ・フェミニズムと呼ばれる研究の動向を取り入りつつ、『インストール』の主人公の少女、野田朝子が機械（＝非生命、主にコンピュータとネットの世界）との出会いによってどのような自己形成の過程を辿り、アイデンティティを確立していくかを考察し、機械の世界、あるいはニューメディア／テクノロジーの世界は男性の領域と見なされるという問題点にも触れた。ここではこういった問題点をジェンダーのレンズを通じて考察しながら『インストール』にはどのような構図が存在するか分析する。

男性は機械やニューメディア、すなわちテクノロジーに強く、逆に女性は機械などに弱いと一般的に考えられている。性別によるテクノロジーへのアクセシビリティについてのこうした通念は、複数のフェミニストの学者によって議論の対象とされた。女性とテクノロジーは相性が悪いという男性中心主義な思考形態／推論のせいで女性は機械の世界から排除される傾向があり、結果として男性がテクノロジーの主な利用者になっているという点が指摘され、近年の研究では女性と機械の関係は決してジェンダー・ニュートラルではないことが明白になった。[3] そのため、ダナ・ハラウェイを始めとして、各国のサイバーフェ

ミニストの研究たちは、女性がエンパワーメントするため、女性とあらゆるテクノロジーとの距離を縮小し、機械との新しいアライアンスをつくる必要があると訴えているのである。

さて、『インストール』ではテクノロジーの世界へのアクセスがどのように行われるかを観察していこう。『インストール』の主人公、野田朝子は自分の部屋からすべての道具を捨てたあと、せっかくおじいさんにプレゼントしてもらったのに、なかなか使いこなせなかった古いコンピュータだけは廃棄する決心がつかない。コンピュータを捨てるか捨てないかと迷ったあげく捨てることにする朝子の反応は次のように語られている。

> 長い間迷っていたが、埒があかないので、とりあえずコンピューターの電源を入れてみた。軽く錆をこするようなひきつり音が内部から聞こえ、画面に弱弱しい白い光がヴンと灯り、機械が目覚める。
>
> （省略）
>
> のらりくらりと途中で眠ってしまいそうなほどのとろい速度で、機械は少しずつ起動していく。しかしやっと画面にアイコンが並んだと思ったその瞬間、いきなり白衣を着た男のイラストが画面中央で微笑み、それを合図に星が落ちるような音と共に、光が突然画面から消えた。それきり、コンピューターは完全に沈黙。慌てて電源を何度も押す、が状態はなにも変わらず、画面はがらんどうに暗いままである。おじいちゃん、コンピューター昇天、してしまったらしい。合掌。私は機械に向かって手を合わせた。私はコンピューターもおじいちゃんも好きなように振り回すだけで、彼らのもろさを認めようとしなかった。[4]

右の一節は朝子と機械の関係を理解する上できわめて重要である。朝子が機械に手を合わせるのは、まるでおじいちゃんの霊に祈っているように考えられ、コンピュータ自体がおじいちゃんの命の拡張であるかのように解釈できる。この朝子のなにげない行為において、コンピュータは単なる機械ではなくなり、おじいちゃんの分身となり、ハイブリッドのようなものになっている。更に、おじいちゃんとコンピュータのアナロジーは画面に現れる白衣を着た男のイラストにより強調される。イラストはマッキントシュ（Macintosh）の最初のロゴなのだが、[5]まるで朝子のおじいちゃんであるかのように彼女に微笑んで消えてしまい、昇天していったようである。おじいちゃんの生命の光はコンピュータに点滅する灯りと共に消え、生気のな

いコンピュータは朝子の人生から去っていく。だが、朝子がコンピュータをゴミ捨て場に運ぶとまもなく、同じマンションに住んでいる小学生のかずよしにコンピュータをくれないかと問われる。朝子はコンピュータが壊れている「化石電脳機械」[6]だと説明してみるが、子供は自分が直せると言い返し、朝子にコンピュータをくれるよう説得する。

年齢的な序例の点からいえば高校生の朝子と小学生のかずよしは、先輩・後輩といった社会関係にあるはずだが、機械を媒介としたこの人間関係にあっては、現実と異なる世界（社会関係）が開かれることになる。これは、かずよしがコンピュータを直してから朝子に操作などを教えることになる点に明らかである。そこでは、小学校六年生の男の子が高校三年生の女の子に、コンピュータとコンピュータ用語を教えることで、ありきたりの年齢的、学歴的なヒエラルキーが転倒するという事態が出現するのである。朝子は、かずよしがコンピュータを自分の部屋にある押入れに隠したことを知り、それを見に行った時点から機械の世界へと入っていく。

子供は部屋の正面にある押入れの前に行き、その襖を開けた。目の前に現れた異様な押入れの中を見て驚く。押入れには何も収納されてなくて、上下共何も入ってないすっからかんの押入れの上階の左側の奥に、ただコンピューターだけがぽつんとある。その寒々とした薄暗い空間の迫力に押入れってこんな広い収納スペースだったんだ……と思わず感じた。

（中略）

私は早速押入れの上階によじ登りそこに座って、機械のキーボードについている起動のための三角ボタンを押した。すると機械はジャーン！と予想外に盛大な起動音を押入れに響かせてから起動し始めた。

音が大きい！と驚いて言うと子供は、

「インストールし直したせいで起動時の音量も初期の大きさに戻ったんだとおもいます。」と答え、押入れの外から手を伸ばしマウスを手に取った。

「インストールって何？」

「ディスクなんかを使ってコンピューターに新しい機能を取り入れることです。でも僕は、インストールをしたんじゃなくて、インストールをしなおした、つまりリセットしただけです。」

「Eメールはできる？」私は気になっていることを聞いた。

「できます。インターネットも。[7]」

これまでの経緯をみると朝子はおじいちゃんからプレゼントしてもらったコンピュータをかずよしに譲り、それからかずよしは朝子を機械の世界へ導いていくという設定になっている。こういった三人の関係は性別、あるいはジェンダーのレンズを通して検討してみれば、男の人から少女へ、そして少女から子供へ、あるいは、男性から女性へ、そして女性から男性へといった関係のように考えられる。こういった三角関係の中心には、コンピュータ（＝機械）、あるいはテクノロジーがあるが、おじいちゃんとかずよし、もしくは男性がいなければ女性である朝子は機械の世界へ入ることができなかったのではないかと思われる。したがって、朝子は典型的な機械に弱い女性として造型されていると言えよう。その結果、『インストール』における女性と機械の関係はジェンダーニュートラルではなく、フェミニスト研究者たちが批判する男性中心主義的なアプローチを踏襲していると思われる。

一方、性別だけではなく、年齢の見地からも考察を進めてみると、構図が少し異なってくる。コンピュータをめぐって世代が異なる三人が登場する。朝子のおじいちゃんは男性ではあってもコンピュータを一回も用いたことがない高齢者であって、既に故人となっている。そして、一〇代の朝子とかずよしがいるが、まず、朝子の場合から考えてみよう。シモーヌ・ド・ボーヴォワールは『第二の性』の中で、「人は女に生まれるのではない、女になるのだ[8]」と論述するが、そういった「女」は歴史的・社会的・文化的構築物としての「女」を表す。朝子は女子高校生だが、社会的・文化的な「女」としての自覚はまだ持っておらず、ここまでの小説の筋で朝子の人物像を規定するのは「性」ではなく「年齢」であることから、「女」としてではなく「ティーンエイジャー」あるいは「思春期の女子高校生」として描かれていると言えよう。同様に、かずよしの場合も「性」ではなく「年齢」、「小学六年生」の見地から理解すべきであろう。ジェンダーは社会的・文化的に作られた性別であり、子供は「性差」に縛られないと主張する学者もあり、シモーヌ・ド・ボーヴォワールもその一人であった。この観点からすれば、かずよしのことは社会的・文化的な「無性的な」子供として扱う必要があるだろう。

ただし、この点については見逃せない重要な要素が二つある。第一には、年齢の見地から見れば、かずよしはいわゆる「デジタルネイティブ」世代の代表者として登場するのに対し、朝子

はいわゆる「デジタル移民」世代の一人であると考えられることである。[9] 第二に、あらためて性別／ジェンダーの問題を取り上げれば、やはりかずよしは男の子であるという事実である。松村泰子は日本では「機械や技術に関する態度の男女差別」が「子どものときから生じている」と述べる。[10] 松村は先行研究や先行調査を参照しながら、ニューメディア（ビデオゲームなど）が提供する内容は主に男性向きであり、それと接する機会が男性に多く、そのため男性は早いときから情報の世界への関心を持ち始めるということを明らかにしている。[11] おそらく、かずよしの場合も同じような状況であると思われる。かずよしは男の子であるからこそ、幼いときからニューメディアが提供する男性向きのコンテンツと接し、そしてデジタルネイティブであるためコンピュータやインターネットやチャットメッセージが朝子よりも早くできるようになったと言えるだろう。

こうして様々な見地から読み解いていくと、上下関係・序列関係・性別関係が各人物造型に影響してはいるもののそれほど前景化せず、かなり曖昧になっているために、朝子はデジタル／機械の世界へ移動する／入ることに、ほとんど抵抗なくかずよしの手ほどきを受け入れることが可能であったのではないだろうか。ここから朝子にとっての「インストールの期間、自分をリセットしなおす期間」が始まるのである。[12]

しかし、二〇年前に書かれた『インストール』と比べて、現在のインターネットや機械へのアクセスをめぐる状況はどうなっているのだろうか。

田中東子は二〇一三年の論考で、先行研究を取り入れつつ若い女子とインターネットの利用について考察しているが、「オンライン空間における表象や発話行為に関するジェンダーイメージや性差別の有無といった問題について、日本ではまだあまり多く検討されていないというのが実情のようである」[13]という結論に至る。だが、前稿の第二節で述べたように、二〇一八年の総務省の調査の結果をみるとインターネットを利用するティーンエイジャーが増加していることは事実である。

近年の日本文学ではこういった状況はどのように反映されているのだろうか。『インストール』との比較をするために、やはりチャットを使用する若い女性の主人公が登場する小説を取りあげたほうがよい。二〇一二年に女性作家の柳美里により書かれた『自殺の国』[14]を取りあげてみよう。本小説は『インストール』より一一年後に出版され、一〇年代初頭の日本小説の大半がそうであるように、福島第一原子力発電所事故がその素材となっているが、それは高校一年生の少女の主人公と彼女の

チャット活動とは関係がないようである。『インストール』と『自殺の国』は様々な面が共通しているが、その一つは両作品ともに女主人公の高校生はネット上のチャットを自分ひとりのスペースであるかのように使用することである。二人ともサイバースペースではインターネットが保障する匿名性を利用し、自分の考えを公表できる（この点はあらためて「人格の二重化」の問題にかかわるが、先述したように、次節で検討する）。しかし、『インストール』と『自殺の国』では、チャットの利用法が異なっている。機械を使い慣れていない朝子と反対に、『自殺の国』の主人公の市原百音は、まずコンピュータではなく、携帯電話からインターネットへアクセスするし、そのために場所・時間を問わずいつでもチャットしたり、自分でスレッドを公開したりする。二人の主人公はそれぞれ、ゼロ年代のティーンエイジャーと一〇年代のいわゆるスクリーンエイジャーの代表として考えられるのである。だとすると、機械との関係はジェンダーの問題ではなく、世代の問題として捉えるべきであろうか。しかし、市原百音は決して機械に弱いとは言えないが、将来、どのような大学に入るかと迷っているとき、「ＩＴ関係じゃないことだけは確かですね」[15]と考えてしまう。

こういった点は再び松村泰子が述べた情報の世界における性別の問題と、テクノロジーの世界に女性が男性と対等に参加する必要性に繋がる一方、ダナ・ハラウェイの「我々の身体を創造しなおすうえでは、コミュニケーション・テクノロジーが必須のツールとなる」という論述にも関わりを持ち、その要素が『インストール』にも『自殺の国』[16]にも認められるのである。どちらの作品でも、おわりに、主人公たちはチャット上の経験から、それぞれの身体の可能性を認識するのである。

『自殺の国』では市原百音は自殺を思いとどまり、教室の窓の外を見てこう述懐する。

> 真っ白だ。
> 泣いているのではない。
> 違う。
> ぜんぜん違う。
> でも、違ってもいい。
> 生きているのだから。
> わたしは、いま、生きている。[17]

同様に、『インストール』では、野田朝子はチャットのやり取りをしながらリアル世界においては身体を持ち、その身体は

コンピュータの画面に書かれてある言葉に反応して、自らの生を実感させることになる。

のりひこ＞突然やけど聞かせてもらう　みやびが一番感じるトコってどこ？！
みやび＞あのね、あそこの、でっぱったところ。
のりひこ＞クリトリス？
みやび＞やあだ
のりひこ＞クリトリス
ぬれた。一つHな言葉を書かれるたびに、下半身が熱くたぎって崩れ落ちそうになり、パンツが湿った。[18]

『インストール』と『自殺の国』は若い女性とテクノロジーの関係というテーマに触れるゼロ年代と一〇年代の小説であるが、二〇年代ではこういった関係性がどのように描写されてくるか興味深い。

三、ゼロ年代の若者に何が「インストール」されたか

前節では「ネットメディア」ぬきでは『インストール』の主人公の野田朝子は「人格の二重化」ができなかったこと、などについて論じた。本節では、なぜ野田朝子にとっては「人格の二重化」が必然であったか、斎藤美奈子が使用した「宇宙人」[19]というキーワードはどのような意味合いで解釈すべきかについて考察していきたい。

小説の始めに、朝子が環境への不適応を感じ、いきなり不登校児になるということが語られるが、その理由はおそらく学校では「別人格」を演じざるを得なかったことと関連があるのではないかと考えられる。この点を理解する上で朝子が高校三年生の女子であり、大学受験を目前に控えていることは見落とせない。

日本では高校三年生は大学受験の時期に入り、精神的なプレッシャーが非常に大きく、毎日必死に勉強し、他の受験生に潰されてしまわないように自分自身と戦い続ける。そして、他の受験生がまるで敵であるかのように受験戦争に身を投じるが、その原因はおそらく生徒たちに「学歴信仰」という思考がインストールされているためであろう。周知のように、七〇年代から八〇年代にかけて日本の社会はあらゆる面において変動し、学歴社会への志向が強化されていった。[20]その結果、受験生はみな自己を殺し、学歴社会が求める集団行動性を身につけ、

受験の環境に応じた人格を演じざるを得なくなった。情報の世界の比喩を用いれば、社会的な期待に応じるため人工的な人格を演じながら毎日勉強だけに励む生徒たちは、ＳＦ作品でよく見かけるサイボーグを連想させる。受験生の目的は受験戦争に勝ち抜くことであるが、それを達成するため、自己を殺し、社会に遠隔操作されているサイボーグのように振る舞うことを余儀なくされていったのである。

しかし、受験を前にしている『インストール』の朝子は小説の冒頭で「私は毎日みんなと同じ、こんな生活続けていていいのかな[21]」と自問する。彼女の問いは、受験生の悩みを代弁するが、サイボーグ化しつつある同級生への批判というより、学歴社会への問題提起であると考えられる。それは、なぜ社会のために「私らしさ」を捨てなければならないのかという問いでもある。朝子の同級生の光一は、彼女の不適応は「ほかの何百人もの人生が乗り越えてきた基本的でありきたりな悩み[22]」であると決めつけるが、やはり朝子は受験戦争から撤退し、不登校児になることによって現実逃避を選ぶ。あるいは、朝子は社会が求める「人格の二重化」（＝受験の時期にＳＦ的サイボーグを演じること、またはほかの何百人もの人のようにサイボーグにキャラクター化すること）や社会制度に反発し、匿名性が保障された「人格の二重化」によって「私らしさ」を可能にするインターネットの世界を選ぶのである。

そして、社会規範や集団規範に反することで、朝子はダナ・ハラウェイが論じたサイボーグに近い存在になっていくと言える。ダナ・ハラウェイのサイボーグはＳＦ作品に登場するサイボーグと違い、誰かにインストールされたインストラクションに沿って行為するのではなく、一体性やステレオタイプや社会が構築したカテゴリーと闘う存在である。そのために、ダナ・ハラウェイのサイボーグは男性中心主義社会に挑戦するフェミニズムの表象になったのである。このサイボーグたちは「真の生命／生活を得んがための犠牲といった発想をイデオロギーの源泉とすることを拒む[23]」のである。彼らの目的は受験に勝ち残ることではなく「生存[24]」である。いうまでもなく、受験戦争も生存競争の一形態と見なし得るが、それは自分自身の生き方ではなく、社会の生存に関わる点を特徴とする。

受験を前に控えながら崩壊しそうになっていた朝子は自分のアイデンティティを殺すより、ネット上で、日本の社会が求める「人格の二重化」とは異なる別の「人格の二重化」を試みることを選択し、そこで自己形成を果たす。斎藤美奈子が「人格の二重化」を余儀なくされるゼロ年代の若者たちを「宇宙人」

と呼ぶが、そういった「宇宙人」はあらゆる意味でサイボーグ化した若者たちにほかならないと思われる。

以上の考察からゼロ年代の若者には社会が求めた集団的な「自己」又は「思考」がインストールされていたと推測できるが、現代の若者たちはどうだろうか。日本ならではの学歴社会というテーマは前節で触れた二〇一二年の柳美里の『自殺の国』にも現れ、『インストール』ともう一つの共通点となっている。

『自殺の国』の主人公の少女、市原百音は大学受験生ではないが、高校に入学する前に同じような受験戦争を体験し、それに勝ち抜けず希望の高校に入れなかった女子高生である。市原百音は自分の状況（＝負けた学生の状況）について次のように語る。

> 中学の三年間塾に通って本命の公立落ちて、楽勝モードだって言われてた偏差値50のママおすすめの私立も落ちて、下見もしなかった偏差値40のすべり止めに入るしかなかった時点でサゲサゲＭＡＸで、もうわたしの人生なんて終わってますって……
> だって、あの入学式……入学式ってアゲアゲじゃなきゃ成立しないセレモニーなのに、新入生たちの顔も保護者たちの顔も先生たちの顔も揃いも揃ってサゲサゲで、受験戦争に敗れたサゲサゲハートに容赦なくサゲサゲが染み込んでったわけですよ……[25]

市原百音は受験戦争に敗れた高校生たちはサゲサゲで白けた若者のようだと述べるが、彼らは社会的な面から見ると「学生失格」のように考えられる一方、受験勉強のため必要であるＳＦ的サイボーグになり損ねたという面から見れば「社会失格」とも考えられないだろうか。あるいは、学歴社会が求める自己殺しの集団思考が彼等にはうまくインストールされていなかったのかもしれない。それにせよ、一〇年代の若者たちもゼロ年代の若者たちと同様のプレッシャーに圧倒されているということは明らかだ。

さらに、『自殺の国』はタイトルから推測できるように、『インストール』では触れられていない、社会制度への不満などから生じる自殺願望という重いテーマも扱っている。本命の高校の生徒になれなかった市原百音は中学校の受験戦争の渦中にある弟の現状と、母が弟の勉強に注ぐ熱意と、同じクラスの少女たちの行為を見ながら、自分が生き甲斐のない生活を送っていると思い込み、チャット上の自殺志望者のためのスレッドを開

くことにする。最終的には、市原百音は自殺未遂者に留まるが、自殺を考えたこと自体は一〇年代の日本の社会には学歴信仰という思考が根深く残り、ゼロ年代よりも深刻な問題になっていたことの証しであると思われる。そうであるならば、遠距離教育と自宅学習で幕を開けた二〇年代の小説には、若者たちが見る日本の社会と受験生の生態がどう描かれるかという点は興味深い。『インストール』の野田朝子は不登校児になり、リアル世界の人間とコミュニケーションをせず部屋の押入れにあるパソコンを打ちながら時間を過ごすが、自宅学習を強いられた二〇年代の若者たちはどういう選択をするのだろうか。

『インストール』と『自殺の国』には、若者たちに関する共通点がさらにもう一つ認められる。それは家族や周囲の人とのコミュニケーションのあり方である。野田朝子も市原百音も、自分の家族のメンバーと会話するより、ネット上のチャット会話を好むという要素がある。

『インストール』に登場する青木家と野田家は昭和後期から平成初期にかけて確立されたサラリーマンの夫と妻と子供という家族構成ではなく、平成年代に形成された新しい家族形態を反映している。ゼロ年代は、「日本での階層化社会の二極化と核家族（表裏一体化する都市部の単婚家族の家庭内介護から解放）と非婚化の進行の時期」[26]であった。野田家は朝子と彼女の母の母娘家族であり、青木家はかずよしと、かずよしの父と、かずよしの父の後妻（＝かずよしの継母）の、三人の家族であり、どちらも普通の核家族とは決して言えない。そして朝子もかずよしも自分の母親とコミュニケーションがうまく取れず、挨拶の交換程度しかしない。これもまた日本の社会、あるいは日本の社会が人にインストールした思考によるのではないだろうか。朝子の視点では、朝子の母は仕事で忙しく、朝子が自分の部屋から家具を捨てたことも不登校児になったことにも気づかず、自分もほかの何百人と同じように受験の勉強に励んでいると思い込んでいるようである。その結果、然るべき母親の監督を受けていない（＝愛されていない）と思ってしまう。こうして、学校でも家庭内でも果たせないコミュニケーションの可能性をチャットに求めることになる。

『自殺の国』に登場する市原家は核家族でありながらも父に愛人がいるし、母は弟だけに注意を注ぐし、四人で会話することもないため、まるで同じ家に住む四人の他人の集合であるかのように描写されている。こういった環境であるため、市原百音は野田朝子と同様に母親をはじめ家族から疎外されていると考えてしまい、孤独感からインターネット上の文字会話を好む

ようになり、自殺願望者同士とのスクリーン上でのバーチャルな縁／疑似家族の関係を結んでいく。

近年では日本の社会は「無縁社会」であるとよく言われるが、石黒格は最近のエッセイ[27]でこの点を近年のデータに基づきつつ分析している。この数一〇年間で血縁、社縁、地縁といった、人が自分の好みで選ぶことのできない関係性が希薄になった（無縁社会化した）反面、インターネットやSNSなどの普及に伴い、二一世紀に入ってからはそれぞれが自分の好みに応じた付き合いを構築できるようになり、個人の選択可能性が上昇したと言われている。これについて石黒は、無縁社会化、即ち日本人が孤立化しているというより、人間関係の「場」が変化していると指摘する。血縁、地縁、社縁といった従来の「場」の影響力が弱まり、選択の自由と可能性が増大し、関係が個人化した。それはまた一方で、社会的約束であらかじめ共有された「場」と違い強制から自由であるが故に、個々人がそれぞれの意志や能力に頼って社会的関係を築いていかなければならないことを意味する。

ゼロ年代の『インストール』と一〇年代の『自殺の国』を見ると日本はいわゆる無縁社会のような状況が進行していることが解る。『インストール』においても、『自殺の国』においても、主人公の少女は学校、家庭からの疎外感を抱き、そこでの関係性を築けない。そして、その喪失感を埋めるためにネットの世界に入り込み、社会的規制から自由な空間で個人化された関係性を結ぼうとする。選択の余地がない社会関係の後退は、そこに違和感を感じる人間にとっては、ダナ・ハラウェイが論じたサイボーグ化を支えていると言えるのではないだろうか。

『インストール』でも、『自殺の国』でも、最終的に主人公は学校に戻るが、以上の考察から、ゼロ年代の若者たちには社会が求める集団思考とSF的サイボーグ化の必要性がインストールされていた一方、その傾向から逸脱する考え方を育む自己認識も潜在していたと言えるだろう。

四、おわりに

本研究では、前半の『自分ひとりのチャット部屋』（注2の前稿）と後半を本稿に分けて、なぜ二〇二〇年の現今から再読しても『インストール』は新鮮でリアルに感じられるのかという問いに答えるために、若者とインターネットの繋がり、女性と機械の関係、また若者から見た日本の社会などを、ゼロ年代の状況と二〇年代の現在の状況を比較しながら論じた。

『インストール』の新鮮さとリアリズムについては、芥川賞受賞当時から、主人公の少女、野田朝子が年齢的に作者よりひと回り下に設定されており、作者自身の実体験が下敷きになっているという点が挙げられて来た。しかし、ここまで述べてきたように、『インストール』には、インターネットを通じて自分のアイデンティティを形成すること、女性と機械の関係性、「人格の二重化」の必然性と家族とのコミュニケーションのあり方といった、社会においても、またその表現である文学においても、その後に発展あるいは深刻化する問題が内包されていたことは見逃せない。

この二〇年間で、インターネットの利用や普及に大きな変化が見られたが、『インストール』が先取りしていた機械の世界でのジェンダー差別、若者たちが生きる学歴社会や家庭内での意思疎通の困難などは、依然として存続している。また、最後に、野田朝子と彼女の母との関係から、日本の社会におけるコミュニケーシのあり方について触れておいた。

今後は、オンラインコミュニケーションが普及していくとは推測できるが、二〇年代の若者たち（スクリーンエイジャー）はどのようにして自己形成をしていくだろうか。おそらく、本稿の前半で述べた「自分ひとりの（チャット）部屋」ではなく、自分ひとりのチャンネル、あるいは自分ひとりのサイバースペースやユーチューブチャネルなどが必要になるのだろうか。それとも、宇佐見りんの『推し、燃ゆ』[28]の主人公の高校生、あかりのように、自分のアイドルや他人を推すためのツールになっていくだろうか。また、これからの若者たちは、ダナ・ハラウェイの定義によるサイボーグ化へ展開していくか、それとも既存社会が要請するSF的サイボーグ化へ進んでいくのだろうか。そういった変容が若者たちを主人公にした今後の小説にどのように描かれていくか、注目していきたい。

（1）斎藤美奈子『日本の同年代小説』（岩波書店、２０１８）１８７頁。
（2）スペッキオ・アンナ（Anna Specchio）「自分一人のチャット部屋―二〇年後に再読する綿矢りさ『インストール』」（『國學院雑誌』第一二二巻四号、令和三年四月十五日発行）19–34頁。
（3）アマンダ・ドゥ・プリッツ（Amanda du Preez）『Gendered Bodies and New Technologies. Rethinkg Embodiement in a Cyber-era』（Cambridge Scholar Publishing 2009）、第2章；トレーシー・ケネディ（Tracy L.M.Kennedy, Tracy L. M.,「An Exploratory Study of Feminist Experiences In Cyberspace」（『Cyber Psychology & Behavior』3（5）号, Mary Ann Liebert, Inc., 2000）７０７–７１９頁；イーブ・シャピロ、『Gender Circuits. Bodies and Identities in a Technological Age』（Routledge、2015）（論者英日翻訳）、第1章：

松村泰子「ニューメディアとジェンダー」（井上輝子・上野千鶴子・江原由美子編『日本のフェミニズム7号・表現とメディア』岩波書店、２００９、１４８-１７４頁：鈴木みどり「メディアと女性」（岡満男・山口功二・渡辺武達編『メディア学の現在』世界思想社、１９９７）１８３-２０１頁：竹岡 篤永「フェミニズムのインターネット利用とサイバースペースでの活動」（日本女性学研究会「女性学年報」編集委員会『女性学年報』28号、２００７）1-18頁：山田祥恵「インターネットと女性 —つながること、伝えること」（『情報の 科学と技術』48-12号、１９９８）６８４-６８８頁。

（4）綿矢りさ、前掲書、11-12頁。

（5）マッキントシュのロゴのイメージはヴァンタージュ・マック・ミュージアム（Vintage Mac Museum）のホームページ上で見られる。http://vintagemacmuseum.com/the-hidden-history-of-mr-macintosh/

（6）綿矢りさ、『インストール』、河出書房新社、２００１年、21頁。

（7）同上、44-46頁。

（8）シモーヌ・ド・ボーヴォワール（Simone De Beauvoir）『第二の性・体験〈上〉』（新潮文庫、２００１）決定版、３０１頁。

（9）明確な基準はないが、一般にデジタルネイティブ（Digital Native）とうのは１９８５年以降に生まれた年代の人を、デジタル移民はその前に生まれた人を表すが、区別は物心ついた頃からデジタル環境が身近にあり、リアリの世界とバーチャル世界が共生しているかどうかに関わる。

（10）松村泰子、前掲書、150頁。

（11）同上、１４９-１６９頁。

（12）岩田英作「綿矢りさの出発点」（『島根女子短期大学紀要』44号、２００６）35頁。

（13）田中東子「オンライン空間と女性たちによる表現文化の分析可能性」（日本マスコミュニケーション学会編『マス・コミュニケーション研究』83号、２０１３）、81頁。

（14）柳美里『自殺の国』（河出書房新社、２０１２）。

（15）同上、27頁。

（16）ダナ・ハラウェイ、『サルと女とサイボーグ・自然の再発明』（青土社、２０００、高橋さきの英日翻訳）、３１５頁。

（17）柳美里、前掲書、２５１-２５２頁。

（18）綿矢りさ、前掲書、72頁。

（19）斎藤美奈子、『日本の同年代小説』（岩波書店、２０１８）、１８３頁。

（20）日本の「学歴社会」については複数の記事や批評研究などが発表されてきたが、参考に次のオープンソースペーパーが薦められる。陳品紅「１９７０・80年代日本の社会変動—学歴社会論に焦点を合わせて」（『桃山学院大学社会学論集 第48巻第1号』２０１４）１１５-１４２頁：渡辺良智「学歴社会における学歴」（青山学院女子短期大学編『青山学院女子短期大学紀要』60号、２０１６年12月）87-１０６頁。そして、日本現代文学に関しては何冊かの小説に出てくる話題であるが、日本の社会の変動にフォーカスする小説といえば桜庭一樹の『赤朽葉家の伝説』である（創元社、２００６）。

（21）綿矢りさ、前掲書、３頁。

（22）同上、４頁。

（23）ダナ・ハラウェイ、前掲書、３３９頁。

（24）同上。

（25）柳美里、前掲書、17頁。

（26）日本社会文学会編『社会文学の三〇年・バブル経済、冷戦崩壊、３・11』（菁柿堂、２０１６）、１３２頁。

（27）石黒格『変わりゆく日本人のネットワーク：ＩＣＴ普及期における社会関係の変化』（勁草書房、２０１８）。

（28）宇佐見りんの第二作『推し、燃ゆ』（河出書房新社、２０２０）は二〇二〇年に刊行され、第１６４回芥川賞を授与された。受賞時の宇佐見りんは19歳で、綿矢りさ、金原ひとみ両氏に次く歴代三番目の若い女作家である。『推し、燃ゆ』にもネット上の関係がリアルに描写されているのだが、綿矢りさの『インストール』と相違して、ネット上でのサポーター（推しを推す人）も登場する点が大変興味深い。２０２１年に50万部を突破した『推し、燃ゆ』の中にでている主人公たちは現在（二〇年代）を生きる若者を反映していると言えるだろうか。